11月の行事報告 November

11月21日(水)：報恩講法要修行案内

11時：法話「他力の信」渡邊浄道師（朝霞市浄心寺住職）

13時：法話「他力の信」渡邊浄道師

午前の講話は、仏の慈悲につて源信僧都の話を中心に説教された。

午後の講話は、浄土真宗の「他力の信」について講話された。紙面の都合で午後の講話を中心に纏めてみました。概要は、以下の通りです

浄土真宗は他力の教えである。宗教学者のひろさちや氏は他力に二通りあるという。絶対他力と相対他力です。

前者は母猫が子猫を運ぶ時、子猫の首筋をしっかりと咥えています。子猫は只じっとしているだけです。後者は母猿が子猿を運ぶ時、子猿は母猿の胸元にしっかりしがみついて落ちなように努力をして居る。多少の事自己努力をして居る。親鸞証人のいう阿弥陀さんの他力本願は、まさに前者の猫的他力です。信心を得た後の念仏は、「助けて戴いて有り難う」という感謝の念仏です。

お寺は仏の教えを聞く場所で仏にお願いをする場所ではない。人は自分には甘く、他人には厳しいという勝手な物差しで世の中を渡っている。そのために他人との間に摩擦が起こる。物差しを逆転して他人には甘く、自分には厳しく生きたら世の中はまるく納まるのです。

この世の中で腹の底から笑えるのは人間だけです。そんな人間が笑いを忘れているのが現在の世の中です。忙しい生活に終われ心を失っているから感動する余裕がない。従って笑いがない。

人間として生まれた価値がない。

浄土真宗の教えは人間が修行努力して自己改革をせよというものではなく、お寺に来てよき師、よき友いわゆる「善知識」の人のお話を聞く聴聞に徹することです。そしてほとけ様の知恵、慈悲の心を分かることです。

人は誰にも世話にならず自分一人で生きてきたと思うことは傲慢以外の何物でもありません。生きて居るだけで人に迷惑をかけて居るという懺悔の気持ちを忘れないことです.。

仏教の宗派は沢山あるが元はと言えばお釈迦さんの教えが源流となっているのです。人々の聞く能力や器量によって信ずる宗派が違ってくる。他宗の優劣是非を論ずべきではない。悟り目的地が富士山の頂上であることでは一致しておる。ただ登る道筋や方法が各人の機の人心に依るものです。

＊

この世で生きるには人との出会い縁が大切です。「袖擦り合うも他生の縁」と諺にあります。一期一会の気持ちで接する態度がその人の将来を左右する重大な節目となります。こうして中原寺での報恩講法要で皆さんに見えること出来、よいお話を聴聞できるのも何かの縁でしょう。合掌

平成24年12月～平成25年2月壮年会行事

12月の行事

16日（日） 13時　壮年会役員会（役員・監事・理事）
15時　壮年会法座
18時　懇親会

29日（土） 10時　山門、石段清掃奉仕
※当日お手伝い頂ける方は9時半までにお集りください。

2013/1月の行事

1日（火） 8時　元旦修正会・ご流盃のの儀

20日（土） 13時　常例法座

27日（日） 13時半　壮年会理事会
14時半　壮年会 年次総会 新年会

2月の行事

23日（土）～ 24日（日）
10時　東京教区第33回仏壮連盟結成記念研修（箱根湯本ホテル）
13時　常例法座

編集後記（壮年会：平成24年12月会報）

今回は、河合功さんからご投稿をいただき、充実した紙面にすることができましたことを感謝申し上げます。皆様からのご投稿並びに本誌の内容についてのご意見やご要望をお待ちしています。どうぞよろしくお願いいたします。

○編集委員：河合照夫・高木史人・福島秀昭　○印刷・送付：杉田善久

壮年会だより

平成24年12月度中原寺仏教壮年会だより Vol. 8

本年も残すところわずかとなりましたが、皆様おかわりございませんでしょうか？
先月上旬には本堂のお仏具磨きを行い、11月20･21日には多くの方々が参拝する中で「報恩講法要」がおこなわれました。

本年は5月20日に親鸞聖人七五〇回大遠忌法要並びに第17世住職継承法要が行われ、私たち中原寺門信徒一同は新たな出発となる意義深い年でした。国内の政治情勢など予断を許さない状況もありますが、来年も「世の中、安穏なれ」の年を願っています。

9月の行事報告 September

◆9月22日（日）【中原寺秋季彼岸会法要】午後1時

阿満利磨（あまとしまろ）明治学院大学教授先生が「念仏の意味」というテーマで約1時間にわたって講演されました。

・半藤一利著「昭和史」でノモンハン事件の関東軍惨敗に触れ、その原因を当時の軍幹部の「起こって欲しくない事態には触れない」、悪い情報を無視する性癖が原因であると記述している。その後の昭和史の失敗事例（太平洋戦争、不動産バブル崩壊後の金融恐慌）にも同じ失敗の繰り返しに触れている。太平洋戦争での出征兵士を送り出す場面で、念仏者がどう振る舞ったかに言及し、その対応の仕方に批判の目を向けている。

・念仏は浄土に生まれる唯一の方法である。 阿弥陀仏の名を称することは特別に勝れた、しかも容易な方法であり、念仏以外の行（ぎょう）はいずれも功徳の一手段でしかない。世間では、「勝れた方法は実践が難しい。実践が容易な方法は効果が薄い」という観念がある。念仏には私が念仏するという一面と他方、阿弥陀仏が私のなかで働いているという一面がある。念仏は、私が口で称える行為であり、そのかぎりでは念仏の主体はあくまでも私にある。だが、「わが名を呼べ」というのは、阿弥陀仏の要請なのであるから、阿弥陀仏の行為が働いていることにもなる。

・このことは、阿弥陀仏は私たちが念仏をするときのみ私たちに存在するということによる。私たちが阿弥陀仏の名を呼ばない時には阿弥陀仏はどこにも存在しない。

・中国･宋時代のある学僧は「阿弥陀仏は名号をもって人を救う。それゆえ名号を耳に聞き、口に称えるならば名号の持つかぎりなき聖徳が私たちの心に一挙に満ちてきて、永く仏になる種となる」という。

・念仏をすると、凡夫にも二つの智慧が生まれてくると言います。一つは自他を平等に見る智慧であり、二つは個別性、特殊性が分かるようになる智慧である。こうした智慧をもって、私たちは変わり、凡夫なりに慈悲の実践が可能となるのです。

・人間が生きる現実世界は、「五濁悪世」であり、その中で生きる私たちは阿弥陀仏の慈悲により聖徳の心を戴いて、その私たちが他者を慈しむ道を歩むことが大事ではないか。

・この阿弥陀仏の慈悲を暮らしの基準として生きていくことの大切さと、この崩れゆく世の中で踏みとどまる気概を、念仏は私たちに教えてくれるのです。

10月の行事報告 October

◆10月20日（土）【第24回中原寺文化講演会；大阪大学名誉教授大峯顕先生】午後1時半

第24回中原寺文化講演会は、10月20日多くの参加者を迎えて開催されました。大阪大学名誉教授大峯　顕先生の講演で、「仏のいのちと私のいのち」というテーマでお話されました。

人間、長生きして何をするか？長生き必ずしも仕合せではない。長生きしたために不幸に遭遇した例は多々ある。自分の都合のよいように長生きしたいと思うのは人間の我欲に過ぎない。

死は悪いこと、生きることは良いことであるとは誰も思っている。しかしそれがいいことか悪いことかは私には分からない。死が悪いこと、嫌なことだと日本人の心に植えつけたのは古事記の記述による。

イザナギの命（みこと）が、若くして亡くなったイザナミの命（みこと）を忘れられず黄泉（よみ）の国を尋ね再会したが、約束を破って垣間見たイザナミの腐乱した死体を見て逃げ帰った記述から死後の世界の恐ろしさを後世に伝える起源となったと思われる。古事記は当時の日本人の死生観を記述している。

その考え方を普及させたのは、江戸時代中期の国学者本居宣長である。彼は「古事記伝」で人間は死ねば黄泉の国に行く。そこは暗く恐ろしい国であると述べている。浄土真宗を信ずる人以外の日本人は、このような死生観をもっている。

先生は、凡夫が「信心の定まるとき往生も定まる」という阿弥陀様の助けによって後生を迷い続ける不安観を払拭してくれる経過を懇切丁寧に説いて下さいました。浄土真宗の教えを十分に勉強していない小生にとってはかなりの誤解があるかも知れませんが、印象に残った箇所を箇条書き形式で纏（まと）めて見ました。

（次頁へ続く）

10月の行事報告 October

○仏法を聞いていない人は、今でも死ぬことを心配しながら生きているだけです。自分の行く先が分からないんだから、お先は真っ暗闇の地獄です。

○「あと暫らくしか生きられないと心配しながら生きて来たけれど、こんな心配は要らなかったのだ」ということに気づかせてくれる。これが「信心を獲(え)た」ということです。

○法蔵菩薩の大仕事が終わり阿弥陀様になられたのは、私達が生まれてくるはるか昔（十劫(じっこう)のかなた）なのです。本願が成就した時に、私が仏に成るということの約束がもう決まっておるのです。

○如来さまが「お前を必ず仏にする」と仰っているのは私のかたわらで仰(おっしゃ)っているのです。その言葉は「ナムアミダブツ」であります。その言葉こそが阿弥陀様の本願の名号であり、仏様の本当の言葉です。

○人間は言葉なしでは生きられません。言葉の海の中に浮かんでいる存在です。欲望のかたまりである凡夫は、偽りの言葉やごまかしの言葉に惑わされる性癖があります。しかし本当のことを言うだけではこの世では生きていけません。

○求道とは如来様によってとっくの昔に作られてあるお浄土への道を歩むことであります。私たちの人生は死で行き止まりではなく、死を超えてゆくお浄土への道があるということを自覚することです。お浄土で行き止まりなく、そこから娑婆世界へ衆生を救うために還ってくる道もあるのです。そういう往還(おうげん)の道を十劫の昔に阿弥陀様が作って下さっているのです。

○お浄土に往って終わりではなく、今度は娑婆世界に還って来る道が作られてある。これが親鸞聖人の発見された浄土真宗思想の核心である。これを抜きにしたら、浄土真宗はありません。

○最近は、臨終を病院で迎える人が多く臨終説法の機会がほとんどなく、行く先の分からないまま、不安な気持ちで死を迎えることが多い。一般に病室へのお坊さんの出入りは、縁起の悪いものとして忌避されているが、死に直面している人の気持ちを癒すには、臨終説法の必要性を説く意見が叫ばれている。

○寺院は心をいやす病院であり、アミダブツの念仏は点滴である。人は死んでも魂は死ぬことはないという阿弥陀様の心を戴いている人の心は安らかで、顔は明るい。これからも機会を見つけてはお寺を尋ね、聞法を重ねることで安心立命の境地に近づきたいものです。

11月の行事報告 November

11月20日(火)：【親鸞聖人報恩講お逮夜法要】 午後5時

11月20日午後五時から山門から参道に沢山の灯篭が置かれ、今年の夏こども合宿で和紙に思い思いに描いた子供達の作品や門信徒の方々の作品にローソクの火が灯って幻想的な秋の夜が演出されました。

午後五時半から、麻木さんによる音楽と語らいの夕べが行われ、６時から前住職の法話「真実の利益」を伺い、その後おときとして、婦人会に準備していただいた「あずき粥」の接待を頂きました。

宇佐美 勇 氏：写真提供

■報恩とは？：ワンポイント解説

自分が受けた恩に報いること。恩を知り恩に報いることの重要性は諸仏典に説かれるが、正法念処経では、報いることが容易でない恩として、母・父・如来・説法法師の4種を挙げている。

報恩講とは、仏教寺院で、宗祖の恩徳を謝するために開かれる法会。浄土真宗では、本願寺第3世覚如が「報恩講式」(1294) をつくったのが始まりで、宗祖親鸞聖人の忌日の陰暦11月28日を期して、西本願寺では新暦の1月9日から16日まで、東本願寺では新暦の11月21日から28日まで盛大な法会を催す。末寺でも最大の年中法会で、本山の法会と重ならないように期日前に執行する。

（参考：岩波『仏教辞典・第２版』）

感話シリーズ-8

【ご旧跡参拝一日バス旅行参加記】

10月13日（土）、親鸞聖人ゆかりのご旧跡参拝1日旅行に参加しました。快晴に恵まれ、総勢41名。初参加の方が8名。但し残念ながら女性軍が28名、男性軍は前住職、住職、慈俊ちゃんを含めてたったの13名。次回以後は是非壮年会諸氏の多くの参加をお願いしたいものです。

第1の目的地は、茨城県坂東市（旧岩井市）みむらの妙安寺（真宗大谷派）です。このお寺は、親鸞聖人直弟子「二十四輩(にじゅうよんはいちょう)牒」第六番、じょうねん成然(じょうねん)房円信が開かれたとのことです。わが大型バスはレタスやキャベツなどの畑のなかの細い道を進み、お寺に隣接したかなり広い駐車場に到着、ご住職（教誨師として前住職と懇意な方）のお迎えを受けました。大震災直前に完成した立派な本堂に案内されましたが、金箔も光り輝き非常に明るい本堂内部でした。まずは讃仏偈のお勤め、ご住職のお話。特に内陣の中まで入れて頂き間近にお参りしました安阿弥陀仏(あんあみだぶつ)（快慶）作の阿弥陀如来像は、厨子（仏像などを安置するもので観音開きの扉がある）を使わずそのままのお姿でありました。面白いと思ったのは、本堂に大きな太鼓が天井からぶら下がっていました。何のためかと言いますと、お寺の法要の時、門徒の人々は野良仕事をしているので、まず1時間前には鐘楼の鐘を鳴らす、次いで30分前になるとこの太鼓を鳴らすというのです。ミレーの「晩鐘」ではありませんが、童話の世界などののどかな田園風景が思い浮かびます。お茶の接待を受け、また思いがけないことでしたが、各にレタス１箇を戴きました。このお寺の総代さんが、われわれの参詣をお聞きになり、文字通り朝採りでお持ちになったとのことでした。

正門である山門の先の100メートルほどの参道は、周りを畑で囲まれた桜並木と鬱蒼とした杉木立のトンネルで土の道です。“ひょっとしたら800年前もこんな状態ではなかったか、ひょっとしたら親鸞聖人もこの道を歩まれたのではないか”などと妄想を刺激する趣のある情景でした。

ご住職ご夫妻のお見送りを受け、一路「日本橋」へ、つまり昼食のため坂東市の料理屋さんへ。午後も参拝がありますので、ビール、お酒はほどほどにして　料理を美味しく戴きました（これは小生の話です）。

初めの予定では、親鸞聖人が3年ほど滞在されたという「小島(おじま)の草庵」跡へ寄ることになっていましたが、大型バスでは近くに行けないというので、草庵跡から遙か数百メートルほど離れた道路にバスを留め前住職のご説明を拝聴いたしました。

そして第3の目的地であります光明寺（真宗大谷派）―下妻市下妻―へお詣りしました。このお寺は、「関東六老僧」第二番のみょうくう明空房(みょうくう)（俗名三浦荒次郎義忠）が開かれたとのことです。明空が植えた柊にちなんで、かっては柊道場と呼ばれたようですが、また親鸞聖人お手植えとの伝承のある巨大な菩提樹がありました。本堂では、讃仏偈のお勤め、ご住職のお話。こちらでも内陣の中まで入れて戴き、聖徳太子像（県重要文化財）を間近に拝見できました。妙安寺にも聖徳太子像（重要文化財）―この時には龍谷大ミュージアムで展示中―があるとのことでしたが、前住職のご説明では、当時は聖徳太子信仰が当地でも盛んに広まっていて、親鸞聖人のみ教えとが融合?した、とのことでした。また若い頃の親鸞聖人画像（蓮如上人裏書き）を拝見しました。

30代のふっくらとしたお顔で、日頃拝見する有名な聖人画像などとは違った印象を受けました。またご住職の、“小島の草庵から眺める筑波山とその山麓は、聖人にとっては比叡山と東山に比定されていたのではないか”とのご指摘は、むべなるかなと思いました。

若干スケジュールが遅れていましたが、最終目的地、「筑波ハム」の工場へ。単にハムやソーセージの製造過程を見学するのではありません。当然のこと、即売場です。こうなるとご婦人方の出番です。小生は試食品をせっせと戴きながら、“ここではビールなども即売すべきである”などの名案?を密かに考えていました。

帰りのバスは、最後部に陣取った数人の人と、前住職差し入れの名酒を戴き、またカラオケの熱唱などを聴きながらの二時間でした。

今回も充実した至福の一日でした。改めて幹事さんとお寺のご配慮にお礼申しあげます。

以上

河合　功 記